
Little brave ~ 少しだけの勇気 ~

管理人 S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Little brave ｝少しだけの勇気

【Nコード】

N7551A

【作者名】

管理人S

【あらすじ】

何処にでも居そうな平凡な高校生の尚国院悠雅^{しょうこくいんゆうが}は、ある日変わった夢を見る。その日から、よく分からない騒動に巻き込まれていく・・・。多分ファンタジー系ストーリー小説だと思います（汗）

プロローグ

綺麗な星空だね・・・。

そうだな・・・。

この空を見ると、嫌なことなんかみんな忘れちゃいそう・・・。

そうだな・・・。

私達、いま戦争してるっていうのにな。

・・・そうだな。

Little brave

　　＼少しだけの勇氣＼

なんてこと無い夏の朝、俺はカーテンの隙間からさしこむ明るい日の光によって眠りから覚めた。
ベットの上で上半身を起こしたまま寝惚けていたが。

しばらくして、ふと時計をみる。

六時十五分

おいおい・・・、今日は土曜日だったのに。

何で学校が休みの日に限って早起きしまっただ...。平日なんて全然起きれないっていうのによ。

俺は深い溜め息をはいた。まあ、早く起きてしまったのだから、それは仕方ないとしてだな。

あれだ、何か自分でも不思議な位、凄く散歩に行きたい。

何故かは知らないぜ。

どうせ考えても、わからないだろうからな。

俺は無意味な思考はしない派なのさ。

だからだ、買い忘れていた週間雑誌も買うついでに、久し振りに散歩でも楽しむことにしたわけだ。

思い立ったら即行動が俺のポリシーなのさ。

軽率だなんて思わないでくれよ。

「善は急げ」

とも言っただろ。

ジーパンにTシャツという適当な服装に着替えて、俺は近くのコンビニへと歩き出した。

昨夜見た夢のことを考えながら・・・な。

第一章 Story No.1 - 夢 -

雲ひとつ無い澄んだ青空。照り付ける、夏の強い日射し。

俺は頬をつたう汗を拭いながら、最寄りのコンビニへと歩いていた。最寄りと言っても歩くところかなりの距離になる。

だが、考え事をするにはちょうどいい位かもしれん。昨日の夢のことを……な。

昨日見た夢。あれは、夢にしては妙にリアルだった気がする。生まれてから、夢なんて結構な数を見てきたが、昨夜のだけはいつものとは、何かに違っていた。

まるで、夢であって、それでいて夢でない様な……。矛盾してるなんて言わないでくれ。

本当にそうとしか言えないんだからな。

さて、考えるといってもだな、所詮夢だ。具体的な内容までは、はつきりと覚えていない。

そう言つと、じゃあやつば夢じゃねえか、と思うだろう？

ところがどっこい、一概にそうとも言えないんだな、これが。

まあ、とりあえず順を追って夢の回想でもしてみるか……。

Little brave

↓ 少しだけの勇気 ↓

第一章

Story No.1 - 夢 -

回想、しようと思ったけどやめた。

覚えてない、うん。

あれだよ、やっぱりただの夢だ、ありゃ。

夢のようで、それでいて夢じゃないようってのは、嘘だ。

ホントスイマセンでした。

まあ、そんな事を考えているうちにコンビニに到着した。

中に入るやいなや、アルバイトらしき俺と同じ位の年齢に見える女の子の店員が挨拶してきた。

「いらっしやいませ！おはようござん

さんだ。

顔を真っ赤にしてうつむかないでください。

トキメキ感じちゃうじゃないですか。

中はクーラーが効いてて涼しい。

えーと、ジャンプはどこだったかな。

と、雑誌を探している俺に背後から声がかかった。

「お、悠雅じゃねえか。」

ん、誰だ？こんな休日の朝早くに、コンビニなんか居そうな奴なんて俺の知り合いにいたか？

あ、ちなみに悠雅ゆうがってのは俺の名前ね。

俺が振り向くと、高校のクラスメイト、アホの谷口がそこにいた。

谷口か・・・。

遅刻常習犯のお前がこんな早くにコンビニなんかに来るなんて、ど

ういう風の吹き回しだ？

「いや、何か分からんけど、早起しちまってな。もちろん、二度寝しようと思ったんだが、目が冴えて寝れなかったんだよ。だから来た。ていうか、お前も人のこといえる立場じゃねえだろ！」

俺は遅刻したことねえよ。ついでに言えば、欠席も早退も無い。

「あ、そういえば俺、昨日すげえ面白い夢をみたんだぜ！」

ほう、そりゃ面白いな。

「・・・オイ、まだ何も言ってねえぞ・・・。」

不機嫌な顔をつくる谷口。

お前の見た夢なんぞ、落とした一円くらいにどうでもいいね。

「そうかよそうかよ。じゃあ教えてやんねえよ。」

そりゃどうも。

会話を終わると谷口はジャンプを立ち読みはじめた。なんだ、こいつは立ち読み派か・・・。

俺は購入派さ。じっくり読みたいからな。

ジャンプの山から一冊取り上げて、レジに向かおうとしたら、またしても同じクラスの奴が入店してきた。

ん？さっきの店員が何やら意気込んでいるようだ。

今度は噛まないように気合を入れているのか。

「いらっしやいませ！おひゃようっ！じゃ」

噛んだ。

だから、顔を真っ赤にしないでくださいよ。
襲いたくなるじゃないですか。

「あれ？、こんな所で会うなんて奇遇だね。」

ぬ、お前も来たのか・・・国木田。

俺は、立ち読み中の谷口を方を親指で指してやる。

「あ、谷口も居るんだ。」

アホの谷口がこちらに気付いた。

「ん、国木田？お前まで来たのか。」

「うん、何故か早起きしちゃってね。」

それを聞いた瞬間、俺は嫌な予感がした。
まさか・・・。

国木田、まさかお前も変わった夢を見たと言っくんじゃないだろうな？

驚きの表情を浮かべる国木田。

「あれ？どうしてわかったの？」

オイオイ・・・。

何なんだ、これは？

偶然と呼ぶには、出来すぎてないか？

「お前も面白い夢を見たのか、国木田。実は俺もすげえ面白い夢を見たのだ。」

「どうだ、聞きたいだろ？」

「自慢気に話すなよ谷口。」

「そんなに誰かに聞いて欲しいのか。別に誰も聞きたく無いだろうがな。」

「いや、いや。別に聞きたく無いから。」

「ほらな。」

「な、お前も聞いてくれないのかよ、トホホ……。」

「谷口は嘆息しながら、あからさまに肩をすくめた。」

「お前らがそんなに薄情な奴らだとは、思わなかったぜ。」

「俺もまさか現実にトホホという言葉を使う奴が居るとは思わなかったよ。」

「という事は、悠雅も見たんだね？変わった夢。」

「不意に国木田が聞いてくる。」

「ん、ああ、見た。内容は覚えてないが、妙に現実感のある夢だったような気がする。」

「国木田は顎に手をあて、記憶を探る様に言った。」

「ふうん。僕もほとんど覚えてないけど、そんな感じの夢だったよ。」

「

「そうか。というかお前らはこのおかしい偶然に何の疑問も抱かないのか。」

「別に抱かねえけど。」

アホ面で答えるアホの谷口。お前は本当にアホだ。

「僕も特に。普通はそんな事気にしないって。たまには、信じられない様な偶然もあるもんだよ。」

ふむ、国木田の言葉には妙に説得力がある。谷口にはミトコンドリアの質量程も感じられないがな。

まあ、そんなこんなで各自の買い物を済ました俺たちは、休日の早朝という事が原因と思われるガラ空きの広い駐車場の一部を占領し、談笑していた。

「なあ、お前ら気付いたか？」
と、谷口。

谷口、聞くのは構わんが、何に気付いたのかをちゃんと伝えてくれ。

俺の発言に頷いて肯定の意を表す国木田。
そして、谷口は俺たちの反応に軽く溜め息をつきながら言う。

「あの、バイトのレジやってた娘だよ。メチャクチャかわいかった
だろ？」

どうでもいいが鼻の下のびてるぞ。

でも、まあ確かに、面は良かったかな。

ちつつち、と人指し指を振るアホ。

何がちつつち・・・だ、アホか。

あ、こいつアホだったな。

「顔も最高だが、それだけじゃねえんだよ。」

はあ・・・じゃあ一体何なんだ？

お前の言いたい事は大体分かるが、一応聞いてやる。

「お前らも聞いただろ？あの舌足らずのスイートボイスを！」

素直に囁んだと言え。

「さらに肉まんのつもりであんまん持つてきたり、お釣りを渡す時に手を滑らせて落としたりな！」

ニンマリ笑うな気色悪い。するとお前はアレか、彼女がおつちよこちよいの天然娘だと、そう言いたいのか。

「Exactlly!!良く分かってるじゃねえか、悠雅！」

叫ぶな、そして唾を飛ばすな。きたねえだろうが。

あと、英語を使う意味が分かん。

「もう、サイコーだろ！？むっちゃ萌える。むっちゃ萌える。」

萌えんな。

俺は、何も言わず黙って話を聞いていた国木田を不自然に思い、見てみた。

何ニヤニヤしてんだ？国木田。

「いや、ちよつとね。」

笑いを堪えているようだ。

「谷口、もしかして、あの娘に惚れたの？」

ストリートだな、国木田。

「当たり前だろ！？あれで惚れない奴は、ホモだ！」
もう、ウザイ位テンション高えな。

「ふーん。まあ、頑張つて。僕はそろそろ帰るよ。」

あ、じゃあ俺も。

国木田とは家の方向が同じだからな。

「そうか、じゃあな。俺はあの娘を落としてみせるからな。」

そうですか。

「なんか彼女のことでも分かったら教えてくれよな！」
お断りしますよ。じゃ。

俺は何か言ってる谷口をシカトして、国木田と家に向かって歩きだした。

で、そろそろ教えてくれてもいいよな。

谷口から十分離れた事を確認した俺は、歩きながら尋ねた。

「何を？」

しらばっくれんなよ。お前がさっきからずっとニヤニヤしてる理由だ。

国木田は、視線を前に向けたまま、ふふつと笑い、

「実はね、さっきの谷口が惚れたあの娘、僕らと同じ美並高校の生

徒だよ。」

.....。

これは流石に驚いたね。
奇跡の様な偶然だな。

・・・マジか。

「マジ。確か、名前は藤咲さんだったかな。」

成程、そういう事だったのか。谷口はそれを知らないようだったしな。

うん、と頷く国木田。

ところで、何でお前はその藤咲さんとやらの事を知ってるんだ？

「藤咲さんは僕と同じ風紀委員だからね。」

今だにニヤついている我がクラスの風紀委員。

オーケー、合点がいった。まあ、美並高は一学年に20クラスあるから、知らない奴がいてもおかしくないか。いや、むしろ知らない奴の方が多いな。

「そういうこと。」

と、まあこんな話をしているうちに国木田の家の前まで来た。

すると国木田は、

「悠雅、一つお願いがあるんだけど。」

とか言い出しやがった。

フツ、わかってるよ。谷口には言っなってことだろ？

「あ、よく分かったね。ふふっ、それじゃ、よろしく頼むね。」

了解、頼まれてやるよ。

俺がそう言っと、国木田は最後に軽い会釈をした。

「じゃ、月曜に学校で。」

片手を挙げるだけで返事をし、俺は帰路に着いた。

帰ってもう一度寝よう…。

第一章 Story No.2 - 登校 -

.....。

何処からともなく声が聞こえる。女達の声だ。

「やっぱり、今のままじゃいけないと思います。
あつちに、行くべきなんじゃないですか？」

「しかし、あまり深く干渉してしまうと、あちらに影響を与えかねない。」

「うん、確かにそうよね。でも、今のままじゃ状況はどんどん悪化していくわ。それも事実よ。」

「てかさ、今更そんな議論なんかしても意味無いと思うで。」

「.....?」

「何で、ですか?」

「ちよいと前やけど、一人あつちに行ってもた子がおるねん。」

「え?そんな事、無理でしょ?だって、KITOUSキトウスの使用許可は
出していないはずよ!-」

「まさか、とは思っが.....」

「.....例の子じゃ、無いですよね?」

「はぁ……。残念ながら、そのまさかや。」

「……………」

「そうですか……。」「

「ちょっと！！！何でアンタはそれを知っておきながらあの子を放つてたのよ！？」「

「だってそんなんウチの管轄ちゃうもん。」「

「アンタって奴は……。」「

あの……。お話中のところ悪いが、一体、何の話をしているんだ？

「え！！！？」「

「…何故、彼がここに？」「

「もしかして、あの子

そこまで聞いて、俺の意識はブツツリ途絶えた。

と、同時に腹部に死ぬかもしれない、と思う程の激痛が走った。

L i t t l e b r a v e

あまりの痛みのおかげで深い睡眠から覚醒したとき、俺の腹に我が家の怪獣の白い膝が直撃していた。猛烈に痛い、寝起きに悲鳴をあげる気にはなれないので、腹を抱えてうずくまる。

俺は腹を抱えたままの体勢で、痛みの原因を白い目で見てやる。

「何？」

淡々とした声の返事が返ってきた。

何？じゃないぞ。睡眠中の人間にフライングニードロップを喰らわすとはどういう事だ？

「だって、お兄ちゃん全然起きないんだもん。」

そうか・・・。

いや、そうかじゃないよ俺・・・。はあ……溜め息デター。

いいか、^{まなか}愛佳。

お前ももう中学生なんだ。年頃の女の子なんだから、もっとおしとやかにしてないと、男も寄って来ないぞ。

妹は口をアヒルにして、

「いいもん、男の子なんて寄って来なくなつて。あたしは色気より食い気だしね。」

とか、言いやがった。

苦笑いするしかないよう……。

「それに……………」

ん……？

それに、なんだ？

「んーん、何でもない。」

ふむ、妹の頬が少し紅潮して見えるのは、俺の見間違いだろう。

「じゃ、あたしはもう学校行くね。お弁当はリビングのテーブルの上だから。」

分かってるよ。

「お兄ちゃんも早く行かないと遅刻しちゃうよ。」

分かってる。

「ホント？じゃ、いつてくるからね。」

あいよ。

妹は俺の部屋を出ると、勢いよく階段を降りていった。ダダダダダという足音が家中に響く。

うん、やっぱ、もっとおしとやかにした方がいいな、あいつは。

さて、あの怪獣のおかげで眠気は綺麗さっぱり吹っ飛んだことだし、俺も準備をするか。

まあ、準備といっても大抵の事は昨日のうちにほとんどしてるから、

あとは着替えくらいしかないけどな。

時計は七時三十分を表している。

ちよいと急がないと、やばいかもしれん。

美並高まではそんなに遠くないが、まあ20分はかかるからな。

俺は、速攻で制服に着替え、速攻で一階へと通じる階段を降り、速攻で朝飯を食い……、とまあ色々な事を速攻で済まし、愛車のフエラーリ（自転車）で家を出た。

周りの景色がめまぐるしいスピードで、左右を通り過ぎる。俺の銃弾を避けることさえ可能な超動体視力（大嘘）でも速すぎて捕えられない。

……いや、嘘だけだね。まあ、それくらいチャリを飛ばしていると言いたかったんだ。

自転車を飛ばしていると必然的に汗をかく。

これが本当に気持ち悪いんだよ。背中なんかシャツがビショビショになっているしな。

それにしても暑すぎる……。一体俺が何をしたって言うんだよ、神様。居たら出てこい、一発殴ってやるから。

え？わざわざ殴られになんて出てこないって？

いや、分かってるよ、そんなこと。例しに言ってみただけだ。

大体、神様なんか俺は信じてない。そんなものが居たら、こんな下らない世の中にはなっていないはずさ。

所詮、この社会は未完成な人間だけの力で成り立っているんだよ。ホントにつまらん……。

と、まあ心の中で静かな怒りと焦燥を感じているうちに学校が見えてきた。

フツ、ここからは俺の領域だ。この地点から美並高校へと続く長く急な下り坂、それが終わると同時に現れる、角度のあるS字コーナーがある。

今日もやってやるよ。

ゆくぞ、俺のフェラーリ！お前のエキゾースト・ノートを目の前をノロノロ走る凡車共に聴かせてやれ！格の違いを思い知らせてやるんじゃないか！

シフトギアを3にいれる。アクセル全開、フルスロットル……！！！！

俺は、登校中の生徒共の合間を縫って走る。

段々とコーナーが迫ってくる。

第一コーナーまでの推定距離、30メートル……20メートル……15……10……5メートル……！！

ここだッ……！！

フルブレーキング……！！

フロントタイヤが悲鳴をあげる。同時にリアの荷重が抜け、滑り出す。

カウンターは最小限に抑えたまま、クリッピングポイントを通過。そして、コーナーの外側に荷重をかけ、一気に切り返す。いわゆる逆ドリフト。リアタイヤが白煙をあげ、グリップを回復させようとギャギャギャという音を出す。

そのままコーナーをクリアして校門に突入。

校内では、乗車してはいけないのでフェラーリ（くどいけど自転車）から飛び降りる。

俺のフェラーリは、倒れることなく校長先生（かつら付き）に直撃。

・・・あー、ヤバイよヤバイよ（出川哲郎風）

校長のかつらが・・・。

いや、そうじゃなくて！

逃げるんだ、オレ！

フェラーリを捨ててでも！

ということで、逃げた。

ばれた。

めっちゃ怒られた。

幸い退学にも停学にも、ならなかった。

優雅は16の経験値を手に入れた！

時は過ぎ、いつの間にか昼休みになってたよ。

俺は教室で、谷口、国木田と共に弁当を食っていた。

「ホント、優雅はアホだよな〜。」

弁当の卵焼きをつつきながら言う谷口。

お前にだけは言われたくない。アホの代名詞のお前だけにはな。

「でも、流石にあれは駄目でしょ？」

あれって何の事ですか、国木田くん。俺にはさっぱり分かりませんよ、ははは。

「うわー、優雅が壊れた〜。だははは。」

黙れ、プリンス・オブ・アホめ。お前は坂田師匠とアホ対決やって、

『まだまだだね。』

とか言ってる。

「まあ、何の処分も無くて良かったんじゃない？」
言いながらミートボールを口に放り込む国木田。

まあ確かに。やはり日頃の行いが良いからだ。
谷口なら、即退学だろうって……ん？
どうした？国木田。

国木田は目を全開にして、驚いている。目線は、教室の後ろの扉に・
……ってオイオイ。

あれは、藤咲さんとやらじゃないか……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7551a/>

Little brave ~ 少しだけの勇気 ~

2010年10月17日02時30分発行